山と博物館

第33巻　第2号　　1988年2月25日　　大町山岳博物館

アルプス動物園（インスブルック）25周年記念メダル

インスブルックのアルプス動物園が25周年を迎え、この記念式典と祝賀会に大町市民友好訪問団が出席したことは、本誌32巻10号（1987年）に平林国男館長が報告されている。アルプス動物園では、記念事業の一環として5種の記念メダルを発行した。

これは、すでに1985年から始まっていたもので、1987年に完結をみた。市立大町山岳博物館には一式寄贈され、保管されている。

メダルの仕様：それぞれに金・銀・銅の3種類があり、直径45ミリ、厚さ3ミリである。「金」は純金メッキ仕上げで、値は600シリング（約6600円）、「銀」は純銀メッキ仕上げ420シリング（約4600円）、そして銅は240シリング（約2600円）である。裏面はインスブルックとチロル州を表徴する盾の紋章をあしらってある。

1．ヒグマ（Braunbär ブラウンベーア、英名 Brown bear ブラウン　ベア）学名*Ursus arctos* ウルススアルクトス。北海道のヒグマは亜種でエゾヒグマである。

2．アルプスアイベックス（Steinbock シュタインボク、英名 Alpine Ibex アルパインアイベックス）、学名 *Capra ibex* カプラ　イベクス。ヨーロッパに分布する野生のヤギ。角は生え変わることはない。乱獲がたたって、絶滅に瀕したが、現在はアルプスに安定したコロニーがもどってきた。

3．ユーラシアカワウソ、別名ヨーロッパカワウソ（Fischotter フィッシュオター、英名 Otter オター）、学名 *Lutra lutra* ルツラ　ルツラ。環境の変化に耐えられない種の一つ。アルペン動物園では非常に大切にしている。

4．ヒゲワシ（Bartgeier　バルトガイヤー、　英名 Bearded Vulture ビアディド　バルチャー）学名 *Gypaetus barbatus* ギペツス　バルバツス。口角に黒いひげ羽をもっているので、すごみのある顔つきをしているハゲワシ類。

中央.「アルペン動物園の父」といわれるHans Psenner（ハンス　プセンナー）教授の誕生日を記念したメダル。前4種の裏面に刻まれている文字「TIERE DER ALPEN」（アルプスの動物）はなく、この位置に「ALPENZOO」の文字がきている。このメダルは寄贈されていない。　（宮田　渡）

インスブルック アルプス動物園 見学記

宮田渡

オーストリア、チロルの州都インスブルック市にある「アルプス動物園」が開園したのは一九六二年であった。一九八七年（昨年）がちょうど二五周年になる。この式典は九月二二日に挙行された。会場となったワイヤーブルク宮殿は、アルプス動物園の入口の南に位置している。一四六〇年頃の建造物で、この付近に一六世紀のルネッサンス式動物公園があったことと深いかかわりあいをもって、現在のアルプス動物園が存在する。

動物園の位置は、インスブルック市の北にそびえるノルトケッテ山脈（二三〇〇―二五〇〇m）の山すその標高六五〇―七二七mの傾斜地である。最下端はヒグマ園（見取図の6）、最上部はアカシカ園（見取図16）となっていて、北部の境界森林と接している。園内の樹木は可能な限り残してあるので、多種の動物達の生息地を提供している。下方から上方に向かい、小道をじぐざぐにのぼりながら見学できるようになっている。われわれの動物園見学は九月二三日になされた。ここでの飼育動物は一五〇種、八〇〇個体で、入園者数は年間二八万人に達するという。この日は招待された人々でにぎわった。この中には、ウィーンのシェーンブルン動物園のバァルター・フィドラー氏の顔もみられた。

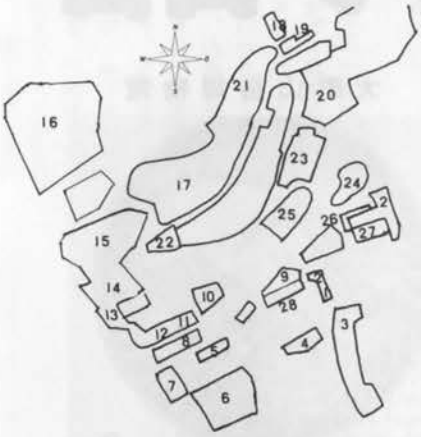

図1　アルプス動物園見取図

1．入場券売場
2．水族館
3．ワイヤーブルク城
4．カワウソ
5．小鳥舎
6．ヒグマ
7．シロエリハゲワシ
8．ヒゲワシ
9．イノシシ
10．ヨーロッパヤマネコ
11．ヨーロッパビーバー
12．アルプスマーモット
13．マツテン
14．シャモア
15．アルプスアイベックス
16．アカシカ
17．ヘラジカ
18．鳥
19．ユキウサギ
20．ヨーロッパバイソン
21．ノロジカ
22．アナグマ
23．オオカミ
24．カモ池
25．オオヤマネコ
26．鳥
27．ホオアカトキ
28．フクロウ

1　カワウソ、ヒグマ

園内の入口付近に案内板があり、最初に目に入った動物はイタチ科の愛きょう者、ユーラシアカワウソ（別名ヨーロッパカワウソ）であった（写真1）。ツンドラ以南のユーラシア、北アフリカに分布するが、チロルでは絶滅したという。しかし園内では一九七八年以後規則正しく繁殖しており、子供の全成長期を誰でもみられるように作られている。カワウソは指に水かきがあるので泳ぎは達者である。また、水中では耳が閉じる構造となっている。ときどき陸に上って立ちあがり、ポーズもとってみせてくれた。本園に飼育されているイタチ科の動物は、他に上等な毛皮で有名なマツテン（*Martes martes*）、胸元が白いムナジロテン（*M. foina*）と日本でもおなじみのアナグマがいる。

写真1　チロル州では絶滅したユーラシアカワウソ

2　クラインフォーゲルハウス、ヒグマ園

カワウソ園の奥に、きわだって人だかりがしているところがあった。そこがクラインフォーゲルハウスで、三月四日にオープンしたばかりだという。ペヒラーナー園長ご自慢のモダンな小鳥のアパートである（写真2）。全体が三部分に仕切られていた。

ここの下方にクマ園がある。まぎれもなく大きいヒグマである。誰も見にきてくれないので、いねむりの最中だった。ヒグマのヨーロッパ中南部における生息地は、ピレネー山脈などの数ケ所に限られている。当園のヒグマは人気者らしく、二五周年記念のポスターにも登場しているし、絵ハガキにもなっている。記念メダルの絵柄として用いられたのは一九八五年である。このクマは木登りが上手らしく、前述のポスターと絵ハガキに登場しているクマは「登り木」に登っている。

写真2　1987年にオープンした小鳥舎

3　ハゲワシ

坂の登り口（7）にシロエリハゲワシ、少し登ったところ（8）にヒゲワシがいる。シロエリハゲワシ（*Gyps fulvus*、ギプス フルブス）は大型猛禽類の一種で、死体を見つけると低く円を描いて飛ぶ習性がある。これを見た仲間は数分のうちにあらゆる角度から集まってきて、鋭いくちばしで死体の腹部を裂き内臓を食う。小形のエジプトハゲワシ（*Neophron percnopterus* ネオフロン ペルクノプテルス）は骨に残った肉切れを食う。そしてヒゲワシ（写真3）は骨そのものを食う。これが彼等の自然界での食習慣である。

ヒゲワシのくちばしには骨を砕くほどの力があり、口角にヒゲをたくわえている独特の容ぼうによって人気がある。記念メダルの図柄に採用されたのは一九七八年である。そして四シリング切手にもなり、この初日消印は九月二五日であった（写真3の右）。当園には

もう一種クロハゲワシ（*Aegypius monachus*）がいる。以上の四種のエギピウス　モナクス）がいる。以上の四種のハゲワシはいずれもアルプスの住人であったが、絶滅して久しい。しかし、ヒゲワシは、ここでは繁殖施設がととのっており、禽舎の裏側から繁殖のようすが観察できるようになっている。産卵期には、ピストルをもったガードマンが盗まれないように護衛にあたるのだという。

このほかのワシタカ科ではイヌワシ、ヨーロッパハチクマ、ノスリなどが、またハヤブサ科ではチョウゲンボウなどが飼育されている。

4　シャモア、アイベックス

シャモア（*Chamois*）は中南ヨーロッパから小アジアにかけて分布するウシ科のカモシカに近い動物で、アルプスカモシカの別名がある。九亜種が知られている。高山帯や亜高山帯でマツの葉やコケを食べており、けわしい岩場で六―七mも飛びはねるといわれる。オスは大きめの角をもっており、先端が少し曲がっている。角にある節は年輪を形成している。オスはけんか早いので、一つの囲いの中に二頭入れておくことはできない。当園のシャモアは、コースター（ビールのコップ敷き）の図柄に使われていた（図2）。アルプス動物園から寄贈されることになったので、山岳博物館におめみえする日も近い。

シャモア園の上部がアルプスアイベックス園である。この動物は野生のヤギで、一mにも達する長い角をもっている（写真4）。野生のものは人の近よれないような岩場にすみ飛びはねながら崖を登るという。迷信から、アイベックスの体のどこもが多くの病気に効くと信じられ、乱獲されたので、絶滅寸前まで追い込まれたが、現在は分布域の人為的拡大によって絶滅のふちから救われている。

当園におけるウシ科の動物は他にヨーロッパバイソンと呼ばれる野牛がいる。

5　ネコ科、リス科、イヌ科

ヨーロッパヤマネコは、西ヨーロッパからインドにいるヤマネコで、イエネコに近縁である。ユーラシアオオヤマネコはネコ科のなかでは中形で、シベリアからヨーロッパに分布する。毛皮獣として捕獲され、減少しているようである。本種の幼獣が二五周年記念ポスターの絵がらとなっているのを、インスブルックの街のなかでみかけた。

大町山岳博物館でおなじみのリス科のアルプスマーモットにもおめにかかれた。容易にみられるように工夫されていた。この隣りはビーバー科のヨーロッパビーバーの飼育舎である。尾が太く、げっ歯類中で最も水中運動が上手な動物だとされている。一九八二年発行の四シリング切手となっている。

イヌ科のオオカミとキツネは時間がなく、みることができなかった。

6　アカシカ　（*Red Deer*）

最高所にあるアカシカ園は、かなり広いスペースが与えられている。シカ亜科のなかでアカシカは最も進化した動物とされている（写真5）。角は一一〇cmで枝はふつう八本あるが、このような堂々とした角になるために九回も生長と脱落を重ねるのだという。

野生のオスは発情期になるとはげしくたたかうので、かなりの危険と体力の消耗をともなう。動物園でオスのライバルが存在しない場合でも、発情期にはよほどの緊張感がおとずれるのか、大幅な体重の減少がみられるという。

ヘラジカもまた広いスペースが与えられている。オオシカの異名の通り、シカ類中最大の動物で、肩高が一、九mもある。これは、キリン、ゾウに次ぐ高さである。角は手のひら状、上唇は長くてラクダ状である。またオスののどには肉垂れがある。

シカ科の動物には、もう一種ノロと呼ばれる小型鹿がいる。また、このほかのほ乳類には、北海道のエゾユキウサギに近縁のマウンテン・ヘアと呼ばれるユキウサギとイノシシがいる。

7　ホオアカトキ

英名に*Bald Ibis*（ボールド　アイビス）が与えられており、これはハゲトキのもので

写真3　長いヒゲをたくわえているヒゲワシと記念切手

図2　コースターに使われているシャモア

写真4　記念メダルにもなったアルプスアイベックス

写真5　シカ亜科のなかで最も進化しているアカシカ

写真6　ワシントン条約適用鳥類ホオアカトキ

あるが、学名からみると明らかにホオアカトキである（写真6）。中央ヨーロッパの山岳地帯には一七世紀まで生息していたが、現在はモロッコとトルコに分散しているに過ぎない。ワシントン条約適用鳥である。アルプス動物園では繁殖に成功し、これまでに一五〇羽のトキを巣立たせているという。

8　その他の鳥

スイスのピラトス山頂（二一二九m）で、くちばしの黄色いカラスがゴミ箱をあさっていた。これがキバシガラスだった。アルプス動物園には、くちばしの赤いベニハシガラスもいる。ライチョウ科では、山岳博物館に寄贈されたものと同種のヨーロッパオオライチョウやヨーロッパライチョウ、クロライチョウなどにもおめにかかれたが、エゾライチョウは死亡したとのことである。ライチョウに近い種類としてはハイイロイワシャコがいた。

坂道をおりてくるとき、一段と人だかりのしている禽舎があった。そこにはムナジロカワガラスという珍種がいて、この鳥の水中ダイビングが観察できるようになっていた。「本園における絶妙のメンバーの一つで、他園で見ることはできない」という自慢の鳥である。

フクロウ科の珍種は目が黄色のキンメフクロウである。ノガンは一九八二年の三シリング切手になっている。カモ池の周辺にはコウノトリ、ナベコウが遊んでいる。

9　あとがき

かけあしの見学であったので、両生・は虫類などを見る時間がなく残念であった。当園は、見学に便利にできており、動物への愛情が到るところでにじみ出ていた。

Im Jahre 1987 feierte der Alpenzoo in Innsbruck das 25 jährige Jubiläum. In unserer Stadt Omachi wurde eine Besuchergruppe zur Freundschaft zwischen Omachi und Innsbruck gebildet und nahm an der Jubiläumsfeier in Innsbruck teil. Für die freundliche Einladung bedanken wir uns herzlich bei Dr. Helmut Pechlaner, Direktor des Alpenzoos und den Herren im Verein Forschung und Lehrinstitut des Alpenzoos, die uns dabei einen herzlichen Empfang bereiteten. Hierbei möchten wir ihnen dafür Achtung erweisen,daß die Gebäude und Einrichtungen des Alpenzoos in Einklang mit der Natur stehen,ohne sie zu stören, und alle Beteiligten im Zoo eine ausgeprägte Neigung zum Tierschutz haben.

（大町高校教諭）

引　用　文　献

Hirsch S.,Hofer R.,Ilsinger H.,Pechlaner H.,Thaler E.and Vonwald H.(1986) Alpine animals in the Alpine Zoo of Innsbruck Tirol.
Pechlaner H.(1987) Alpenzoo Innsbruck-Tirol-Austria ; Forschung und Lehrinstitut des Alpenzoo
———(1987) 25 Jahre Alpenzoo Innsbruck;Tirol:39-52.

(W. Miyata)

博物館だより

バックナンバーのお知らせ(3)

次の巻号のバックナンバーがあります。内容は主なものの紹介ですが、ご了承ください。

第12巻第10号（昭和42年10月）
北アルプスの想い出から　村井米子
信州植物寸景（その九）　横内　斎

第12巻第11号（昭和42年11月）
唐沢岳「幕岩」　長沢修介
信州植物寸景（その十）　横内　斎

第12巻第12号（昭和42年12月）
コウモリと俗信　宮尾嶽雄

第13巻第1号（昭和43年1月）
失なわれゆく自然(1)　福島　融
モグラの生活　今泉吉晴

第13巻第3号（昭和43年3月）
失なわれゆく自然(2)　千葉彬司
小さな博物館の誕生へあゆんだ道　輿水太仲
上高地冬の動物とその足あと(三)　坂田　尚

第13巻第6号（昭和43年6月）
北アルプス北部の山今昔(二)　長沢　武
慎太郎さんを偲ぶ　平林武夫

第13巻第10号（昭和43年10月）
夏山衛生パトロールを顧みて　赤沢宗平
夏山常駐隊を終って　蟹沢　馨

第13巻第11号（昭和43年11月）
アンデス登攀＝ソライ南稜・ワスカラン＝　武田睦男

第13巻第12号（昭和43年12月）
北アルプス北部の山今昔(五)　長沢　武
上高地の冬　坂田　尚

第14巻第4号（昭和44年4月）
ネズミのしっぽ　宮尾嶽雄
レーズンを食う鳥　長沢修介

第14巻第7号（昭和44年7月）
山の遭難をなくそう　水田　広
長野県山岳総合センター　上条徳治

第14巻第8号（昭和44年8月）
七夕人形をめぐって　田中　磐
ホロムイソウ分布の南限について　寺島虎男

第14巻第9号（昭和44年9月）
カモシカ　一、飼育カモシカ　千葉彬司

第14巻第10号（昭和44年10月）
大町周辺の気象　丸山定利
ハイマツの樹令　名取　陽

第14巻第12号（昭和44年12月）
青木湖の生物　倉田　稔
梓川の水生昆虫群集　小松　典

（次回につづく）

バックナンバーの請求方法

右記にご希望のものがありましたら、一部100円でおわけします。巻号と部数を明記のうえ、現金書留か口座振替で大町山岳博物館宛ご送金ください。着信次第お送りします。（送料当方負担）品切れの折は最新号でお知らせします。振替の場合、口座番号は長野四―一三二九三です。

山と博物館第33巻第2号
一九八八年二月二十五日発行
発行所　長野県大町市　大町山岳博物館　TEL(22)〇二一一
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）